

第 11 回尖石縄文文化賞

受賞者:サイモン・ケイナー

尖石縄文文化賞条例にもとづく同賞選考委員会は、柳平千代一茅野市長の諮問を受け、8月30日尖石縄文考古館で行われた。今回、選考・審査の対象となったのは、自薦・他薦による個人延べ13件であった。

候補者の内訳は40歳代から60歳代におよび、所属機関や研究歴は多彩で、「受賞の対象となる研究及び活動の業績」についても、宮坂英弑が尖石遺跡の発掘と研究を通じて目指した縄文時代の歴史の本質に迫る優れた研究と活動を示すものであった。このことは、本年第11回目を迎えた本賞の趣旨が、学界はもちろん、広く一般に周知された結果として、まことに喜ばしいことである。

こうした優れた候補者を得て、選考委員会において慎重な審議を行った結果、第11回尖石縄文文化賞の受賞者として、Simon Kaner（サイモン・ケイナー氏、セインズベリー日本藝術研究所副所長）を全会一致で推薦することに決定した。

サイモン氏は、ケンブリッジ大学大学院を修了後日本に留学し、特に縄文時代の土偶と集落および縄文土器の起源に関する研究を通じ、多数の論文を積み重ねてきた。この間、日本考古学の成果を広く世界に英文で紹介するという執筆活動も続けている。

なかでも、記憶に新しいのは2009年に大英博物館で開催された「The Power of Dogu: Ceramic Figures from Ancient Japan」である。茅野市の国宝土偶（縄文のビーナス）、重要文化財土偶（仮面の女神）をはじめとして、日本の縄文文化を代表する土偶の逸品を一堂に集めた前例のない展覧会であり、縄文文化の魅力を世界に向けて発信、国際的な関心を大きく高めたことは、特筆に値する。また、本年は縄文時代の土偶とヨーロッパの先史時代の土偶との比較研究を試みた展覧会「unearthed」をセインズベリー視覚藝術センターで実施している。

このように、サイモン氏は日本の縄文文化の研究を通じてその人類史的意義を捉え、数々の展覧会・シンポジウムによって、国際的に情報を発信している。まさに縄文文化の国際化にもっとも貢献している一人である。こうした様々な活動は、縄文人の行動や社会生活を明らかにしようとした宮坂英弑の研究を継承・発展させたものであり、本賞の意義にそった、まことにふさわしい受賞者である。

2010年8月30日

宮坂英弑記念尖石縄文文化賞選考委員会
委員長 小林達雄



第11回受賞者 サイモン・ケイナー氏